

I C—19 てんかん患者の血清葉酸代謝

岡山大学医学部神経精神科

山本 光利 1) 高橋 茂 2) 大月 三郎
 1) 現 香川県立中央病院
 2) 現 香川医科大学

抗てんかん剤(AED)服用中のてんかん患者において葉酸欠乏状態が高率にみられることは欧米においては広く認められている。本邦では1970年代を中心として田口ら及び中沢らの2グループによる研究がなされている。田口らは本邦では食習慣の関与が大きく、欧米程には葉酸欠乏は多くないといひ、中沢らは有意の低値を認めている。従来、葉酸測定には、*L.casei* を利用するbioassayが使用されてきたが、近年radioassayにより、簡便に測定が可能となった。本報告は、このradioassayにより、AED服用てんかん患者における血清葉酸代謝を明らかにすることを目的とした。

対象は岡山大学神経精神科通院中のてんかん患者48名(平均年齢36.7才、男27名、女21名、平均服薬年数11.9年)及び、正常対照群として健康成人25名(平均年齢31才、男18名、女7名)。採血時にAED血中濃度、赤血球数(RBC)、平均赤血球容量(MCV)の測定を行った。葉酸の測定は²⁵Iを利用するradioassay(Amersham)により行った。溶血検体は測定より除外した。

結果	葉酸値(ng/ml)	RBC(×10 ¹²)	MCV
AED服用者	3.59±1.74	437±41	94.3±4.4
対照群	4.55±1.96	482±48	90.0±3.9

葉酸値はAED服用者において有意の低値(P<0.05)を示した。葉酸値とRBC、MCVの相関はなかった。対照群の葉酸値の最低値は2ng/mlであり、これより低値を示すAED服用者は3名で6.25%であった。

考察：AED服用者においては明らかに低葉酸血症を示すものがあり、治療上留意すべきことと考えられ、若干の考察を加え報告する。

I C—20 小児てんかんならびに熱性痙攣における免疫グロブリン異常とリンパ球免疫グロブリン産生能に関する研究

日本大学医学部小児科, 沼津市立病院小児科

自治医科大学臨床病理, 富士レビオ(株)中央研究所

藤田 之彦, 日比生 秀一, 有泉 基水, 馬場 一雄
 淵上 達夫, 与座 明雄, 梁 茂雄

伊藤 喜久

李 文昇, 平山 八彦

目的：てんかんの免疫異常は抗痙攣剤の副作用やてんかん素因などの観点から興味もたれている。低IgA血症は、抗痙攣剤の影響による後天性低IgA血症との報告もあるが、抗痙攣剤投与前から存在する体質的低IgA血症も存在する。我々は、小児てんかんならびに熱性痙攣における免疫グロブリン値を測定し、その末梢リンパ球免疫グロブリン産生能を検討した。

対象：熱性痙攣17例(単純熱性痙攣10例、複合熱性痙攣7例、全例未治療例) West症候群7例(抗痙攣剤投与2例)、部分てんかん6例、全汎てんかん11例、その他7例。低IgA血症の基準は鳥羽らによる年齢相当-2SD以下とした。方法：血中免疫グロブリン(IgG, M, A)の定量は、レーザーネフェロメーター、i-PITで行った。PWM刺激末梢リンパ球Invitro免疫グロブリン産生能は、患児末梢リンパ球をHypaque-Ficoll比重遠心法により分離し、RPMI-1640にて3回以上洗浄後、1×10⁶/mlのリンパ球を10%FCS、PWM10μg/ml、RPMI-1640培養液中で7日間培養し、上清中の免疫グロブリン量をLFT法、RIA法で測定した。リンパ球サブセットはOKT₃、OKT₄、OKT₈、OKIA1を測定した。結果：低IgA血症は、単純熱性痙攣²/₁₀、複合熱性痙攣³/₇、West症候群⁴/₇、部分てんかん¹/₆、全汎てんかん⁷/₁₁でみられた。IgGM値の異常はみられなかった。PWM刺激末梢リンパ球免疫グロブリン産生能は、IgGMで異常なかったが、IgAに関しては全体に低値を示し、特に難治性てんかんならびに低年齢なもののほど低値を示した。リンパ球サブセットはOKT₃低値のものが一部みられたが、他では異常はみられなかった。結論：低IgA血症が、抗痙攣剤非投与例においてもWest症候群、全汎てんかんの他 複合熱性痙攣に多くみられた。その成因はIgA産生細胞の素因的IgA産生能低下と考えられた。抗痙攣剤のIgAへの影響は2次的なものと推定された。IgGMには異常は認められなかった。